

紙版 **ハコブネ×ブックス** 秋の増刊号
<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐ web サイトです。

表紙の子どもたちが**本を手**にしていることにご注目ください。この物語の主人公たちはみんな「**読者**」なのです。実在する著名な本が登場します。その本を読むことで主人公は大きな影響を与えられます。自分が以前に夢中になった本を、主人公が好きになるのは嬉しいものです。しかし「**主人公は読者**」である物語の魅力はそれだけではありません。豊かな感受性を持つ主人公と、優れた本が出会う時に生まれるスパーク。本と響きあう心の瑞々しさ。そして、物語に登場する本もまた「**読者**」を得たことで、より魅力的なものとして輝きはじめます。孤独に沈みがちな主人公は読書によって、自分の中にとじこもることなく、人と交流していくパワーを与えられます。本が人と人との架け橋となる。そんな理想が高らかに謳われていきます。物語の主人公と併走しながら、本を読んでいる私たち読者もまた「**主人公**」なのです。

特集

主人公は読者



希望の図書館

FINDING LANGSTON.

作者 リサ・クライン・ランサム
 翻訳者 松浦直美
 出版社 ポプラ社
 発行 2019年11月
 ISBN 978-4591164198



QRコードを読み込むとウェブサイトのレビューを参照できます。

一九四〇年代。最愛の母親を病気で失い、アラバマから父親と二人でシカゴに引っ越してきた少年、ラングストンは、都会の暮らしに馴染むことができないまま、淋しい気持ちに沈んでいました。学校では南部の田舎者と馬鹿にされ、友だちもできず、寡黙で厳格な父親との怪しい暮らしを続ける少年を驚かせたのは、**シカゴでは黒人にも図書館が開放されている**ことでした。「どれでも好きな本を、借りられますよ」という司書の言葉に浮き足立ちながら、棚から抜き出したのは、自分と同じ名前の詩人**ラングストン・ヒューズ**の詩集。そこに書かれていた言葉が、ラングストンを詩と文学の世界へと誘います。やがて少年は、本好きだった母親が、自分の名前をこの詩人からつけたことを知ります。本の世界が自分にはあることがラングストンを勇気づけ、まわりの人たちとの関係も変えていく力となるのです。

ぼくは本を読んでいる。

作者 ひこ・田中
 出版社 講談社
 発行 2019年1月
 ISBN 978-4065142332

review



ウラ面もアリアス



両親の本がしまわられている本部屋で小学五年生の男子、ルカが見つけたのは一冊の古い岩波少年文庫。奥付の発行年から推測して、両親のどちらかが**自分と同じ年頃に読んでいた**もの。興味を覚えたルカは、隠れてこの本を読み進めていきます。物語はルカが『**小公女**』と『**あしながおじさん**』を読む、それだけのお話です。構えず、肩の力を抜いて本を読むルカの感受性は、物語をどう写しとるか。セーラの自尊心にリスベクトを覚え、その空想力に思いを馳せたり、ジュディの行動や態度について考えていく。本について自分の意見を友人や両親と交わすことで考えを深かめていくルカは、**物語に自分の想像力を問われていた**のだと気づきます。ルカの成長した感性は次にとびん本を読み、どう考えていいのか。幸福な連鎖への期待感が心地良い作品です。

貸出禁止の本をすくえ!

BAN THIS BOOK.

作者 アラン・グラッツ
 翻訳者 ないとうふみこ
 出版社 ほるぷ出版
 発行 2019年7月
 ISBN 978-4593100521



review



ある日突然、エイミー・アンの好きな本が、学校の図書室から貸し出してもらえなくなりました。本の内容が**子どもが読むにはふさわしくない**と教育委員会から指示があったのです。「**クローディアの秘密**」が「うそつきや、ずるや、ぬすみのしかたを教える本」だなんて。「**マチルダは小さな大天才**」、「**スパイになりたいたいハリエットのいじめ解決法**」などの名作も**貸出禁止**になりました。エイミー・アンは自分に本を読むことの楽しさを教えてくれた図書室の本を守るため、闘うことを決意します。九歳の女の子が作戦を考え、学校中を巻き込みながら、教育委員会委員会の決定を覆していく痛快な作品です。好きな本を読みたい子どもの気持ちと、子どもに良い本を読ませたい大人の気持ちがせめぎ合います。本が**曲解され姿を消して**いく、恐ろしい警告も孕んだお話です。

ぼくたち負け組クラブ

THE LOSERS CLUB.

作者 アンドリュー・クレメンツ
 翻訳者 田中奈津子
 出版社 講談社
 発行 2017年12月
 ISBN 978-4062832472

ブックリストについて



review



本の虫。そう言われるのをアレックは嫌がりますが、授業中でも本を読んでいたという度を超えた読書好きです。放課後も学校で読書をしたアレックスは**読書クラブ**を作りたいから、一人で黙々と本を読んでいたが、一人が入ってきた名前の「**負け組クラブ**」。これなら誰も入りたがらない、と思いきや、次第にワケありの子たちが集まってきてしまします。アレックスもつい面白い本を人にすすめたくなったり、反応が気になったり。実は共感の可能性や人との繋がりを求めていたのです。目の前の女の子が、あの『**五次元世界のぼうけん**』を読んでいたからうらやましくも、だったら「**きみに出会うとき**」も必読だと思ってしまう。名作『**ひとりぼっちの不時着**』が物語の中でキーになっていたり、**読書好きのツボを押す**憎い作品です。

紙版「ハコブネ×ブックス」秋の増刊号 2019年11月15日発行

●発行人 きむらともお

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト **ハコブネ×ブックス** (非営利) を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、受賞。



Twitter連携しています。@tomoostretch



レモンの図書室

A LIBRARY OF LEMONS.

作者 ジョー・コットリル
翻訳者 杉田七重
出版社 小学館
発行 2018年1月
ISBN 978-4092906198



review



ママを病気で亡くしてからのカリブンは、学校で誰とも親しくせず、本だけを友だちとして、ひとり生き抜こうと思っていました。そんな彼女に声をかけてきたのは転校生のメイです。メイもこだわりのある読書家だと知り、二人は急接近します。本の貸し借りをし、メイの家にも遊びに行くようになったカリブンは、メイのお母さんの優しいや、その家庭の姿に、自分の家が普通ではないことに気づいてしまいます。ママが亡くなってから、パパの心は壊れていたのです。パパを支えていくことがカリブンにはできるのか。その力を、読書と読書を通じて心を通わせた友だちがカリブンに与えてくれました。読書には人の心を支え、結びつける力があるのだと、祈り願いたくなる。そんな想いの結晶のような作品です。カリブンの愛読書はわりとベーシックなラインナップです。



読書マラソン、チャンピオンはだれ？！

Kelsey Green, reading queen.

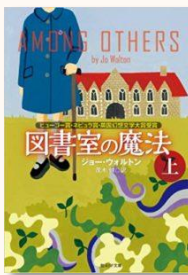
作者 クラウディア・ミルズ
翻訳者 若林千鶴
出版社 文溪堂
発行 2014年11月
ISBN 978-4799900635

ブックリスト っています

review



校長先生が「読書マラソン」の開催を宣言しました。優勝したクラスにはピザの食べ放題をプレゼント。それよりも小学三年生のケルシーの心に火をつけたのは、クラスでトップをとれば最優秀賞読書ランナーとしてプレートに名前が彫られ、学校図書館に飾られることでした。読書家を自認するケルシーにとって、これは絶好の機会です。なにせ算数の時間にもこっそり本を読んでもしょうほど読書が大好きなのです。ケルシーはあまりにも速いスピードで本をかたづけしていくサイモンをライバル視して、本当に本を読んでいるのか疑っていました。彼と『秘密の花園』の話をするうちに気持ちを通じました。本が好きじゃなかった同級生が、ケルシーが薦めた本を読めるようになる欲びもあったりと、読書礼賛の姿勢に貫かれた物語です。巻末のブックリストの解説が濃密です。



図書室の魔法

Among others.

作者 ジョー・ウォルトン
翻訳者 茂木健
出版社 小学館
発行 2014年4月
ISBN 978-4488749019 上
978-4488749026 下



review



友人を持たず、ただ沢山の本を読みふけている少女、モリ。家庭の事情で入れられた寄宿舎学校は、そんな変わり者には不向きな場所でしたが、彼女は孤独さえ読書のスパイスにしてしまうツワモノの読者でした。まだ十五歳なのにどこか達観した彼女の選書はSF・ファンタジーが中心で、かなりのマニア。読解力が高く、読みも深い。モルをとりまく窮屈な環境と、読書生活と幻想的世界とが交錯しながら物語が展開していきます。事故で双子の妹を失った心痛や、学校での孤独な生活を経て、モルは自分の心の居場所を、町の読書クラブに見つけます。人と普通に話をすることもなかった彼女が、読書を通じて自分の意見に耳を傾けてくれる仲間を得る。SFジャンルですが、本を通じて心の世界を広げていく姿にはYA作品としての成長物語の楽しみもあります。



坂の上の図書館

作者 池田ゆみる
出版社 さ・え・ら書房
発行 2016年7月
ISBN 978-4378015514

review



小学五年生の春菜は、住む家のない子どもと母親が入居できる自立支援センター「あけぼの住宅」で暮らせることになりました。お母さんと二人、住む場所を転々とした、めまぐるしい毎日が終わったのです。ここでお母さんは新しい仕事を探し、春菜も学校に通うことができるようになりました。そして、この施設がすぐ隣には、あの白い大きな建物があったのです。市民図書館。そこで春菜は、絵本の「読み聞かせ」を聞き、生まれてはじめて「本を借りた」のです。「ちいさなおうち」「エルマーのぼうけん」やかまし村の子どもたち「長くつ下のピッピ」あしながおじさん。司書に勧められた本に、春菜は時間を忘れて心を奪われていきます。重い生活のリアルに翻弄され、無抵抗なまま自分を表現することができなかった大人しい少女が、本を通じて人と心を通わせ、世界を広げていく穏やかな物語です。



ジェミーと走る夏

Crossing Jordan.

作者 エイドリアン・フォゲリン
翻訳者 千葉茂樹
出版社 ポプラ社
発行 2009年7月
ISBN 978-4591109854

review



隣の家に黒人一家が越してくることを知ったキヤスの父さんは、家の周りに高いフェンスを張り巡らせた。この地域では人種間対立があり、黒人への反感が強かったのです。それでもキヤスは、隣の家の娘で同じ年のジェミーと、陸上競技を通じて心の距離を近づけ親友になりました。二人の交友はキヤスがもたらした古い革装の「ジェーン・エア」を読むことにも広がります。一人では読み通せなかった昔風の難しい言葉ばかりのこの本も、二人で朗読しながらなら楽しめるもので、本に出てくる古い言い回しをまねて会話を盛り込んだり、ジェーンやロチェスター氏の運命を、まるで友だちのことを話すように語り、次第に物語に胸を躍らせるようになっていきます。「ジェーン・エア」を読み終えた二人が、次に『嵐が丘』を手にとるという展開も微笑ましいところですよ。



緑の模様画

作者 高樓方子
出版社 福音館書店
発行 2007年7月
ISBN 978-4834022896

review



中学校に進学する直前の春休みに出会った、まゆ子、テト、アミ。三人の少女は『小公女』の話題で意気投合し親しくなります。彼女たちには、明るくほがらかだけではいられないそれぞれの心の事情がありました。屋根裏部屋で暮らす小公女、セーラへの強いシンパシーと、その毅然とした態度に憧憬を抱くのはどうしてなのか。平穏な日常を送りながらも、どこか不安を抱える彼女たちに見守られていたいと希求する彼女たち。本の中のエピソードに興じながらも、自分の抱く本当の感想を友人の前で話すことに戸惑いを覚える、繊細な心の揺らぎを物語は捉えられます。本に対する本心を口にするには存外、難しい。純粹で高潔でありながら、どこかコントロール不能な危うい心性を抱えて彷徨う少女たちの、柔らかく、それでいて鋭い感受性が見つめる清廉な世界を体感できる物語です。